

## スクリブルの点・線は何を意味するのか

奥 美佐子

### I はじめに

色聴（color hearing）という現象がある。音色と色調を結ぶ共感覚現象をこのように呼び、音楽と絵画（聴覚と視覚）が融合的に作用する状況をいう。これは子どもたちによく現れる現象だと言われ、音や音楽を聴くとき色彩を視たり、描画のプロセスで音から得た色が画面に表現されたりする。また、音楽鑑賞画と呼ばれるジャンルは、音のリズムやイメージを点、線、形、空間構成として意図して表現する手法である。前者は心的作用を伴う現象、後者は感覚を働かせてイメージを意図的に置換しつつ表現する行為で、表現のプロセスに相違はあるが、音楽と絵画の相互交流の様相を呈示している。色聴という現象や音楽鑑賞画の表現手法の存在は、音楽と絵画双方に共通する表現の根があることを示している。

表現の根は自然現象として人間の身体の中に潜んでいるらしい。原点的な時点で音楽

を考えたとき身体にはピッチとリズムが自然な状態で備わっているといわれ、自由な音楽表現にはパルスと呼吸のウェーブに導かれた表現が出現する。描画の原点であるスクリブルには呼吸と心拍を誘因とする点や線が描かれるという。人の身体のリズムがその人個人の原初の表現を引き起こしていて、それはさまざまな表現の根としてある共通性をもって視覚的にまたは聴覚的にあるいは行為として現れるのではないだろうか。

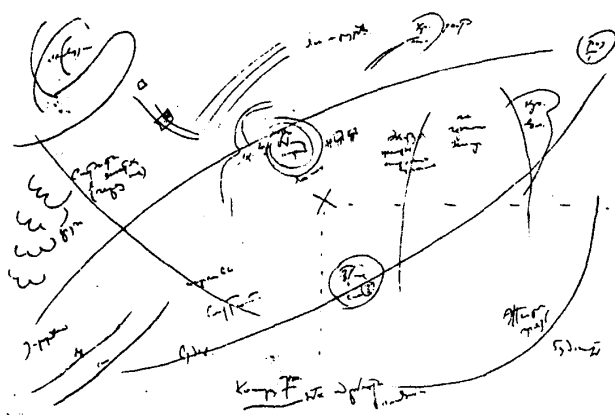


図1 「コンポジション7のための素描」  
W・カンディンスキー 1913

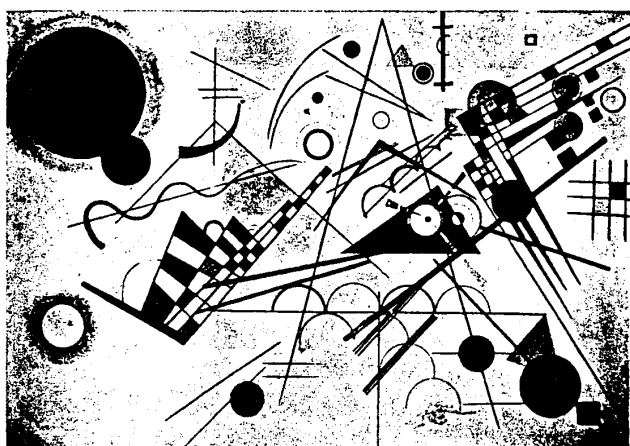


図2 「コンポジション 8」  
W・カンディンスキー 1923

ワシリー・カンディンスキー（1866～1944）は音を絵画で表現しようとした画家であった。彼の抽象絵画や、音を絵画空間に表現する方法論を展開した著書『抽象芸術論1～4』に示した点・線・記号は、描画の原点であるスクリブルに現れる点・線・記号と大変よく似ているのである（図1、2）。それも、2～3歳時期の「音楽を好む子ども」のスクリブルに現れる特色ある点・線・記号と類似している。<sup>1)</sup>これは音楽と絵画の表現を結ぶものとして大変興味

深いことである。人の成長のプロセスを辿ると、表象能力が芽生え活発に働く2歳前後にさまざまな分野での表現の質が変化の兆しを示すことがわかる。発達的にみてもこの時期に表現の根が何らかの形で顕在化しようとしているようにもみえる。この時期を捉えて表出から表現への転換と位置付ける考えもある。しかし、人間の表現行為はその一生のどの時期を見ても表現は人の身体性に依拠すると考えられることから、人はどの時期においても表現するのであり、どの時期の表現にもそのプロセスで表出的表現を含む場合があると言えよう。原点からの表現を視野に入れるためにも、質的变化が著しい2～3歳児の表現に注目する必要があると感じた。

そこで、本稿は2～3歳児のスクリブルに現れる特色ある点や線に着目し、その点や線を通じて音楽と絵画の表現が共有する表現の根源的なものを前稿「スクリブルにおける表現の根」に続いて調査し確認しようとするものである。また、音楽と絵画が共有する表現の状況を探ることを通じて、この時期のスクリブルに現れる特色ある点や線が何を意味するのかについて考察することを目的とする。

## Ⅱ 音楽と絵画の表現における根源的なもの

### 1. 身体に潜むもの

人間の身体にはさまざまな表現を引き起こすリズムが自然な状態で存在しているといわれる。筆者はこのリズムを表現の根として2～3歳児のスクリブルに認めたのであるが、身体に潜む表現の根源について音楽・絵画等、それぞれの立場からの発言を次に紹介して、表現の根の存在を確認したい。

### (1) 音楽が語るもの……自然な生命のリズムと鼓動

音楽は一体どこで始まったのだろうか。その問いにジョン・ペインターとピーター・アストンはベンツェ・サボルチ著『旋律の歴史』（ベイリー・ロックフィル社、1965、p. 1）より次の部分を引用している。少し長いが紹介したい。

〈ものを作ったり、何かを心に描いたり、模倣したりする人間にそなわった天性の能力、これこそあらゆる音楽の原動力である。リズムは、心臓の鼓動、どしゃぶりの雨のしずく、馬のひずめの音などから生まれるし、鳥の鳴き声やオオカミの遠吠えは我々の心に旋律を呼びさます。形式は反復や記憶によってまったく偶然に作り出されるものだ。最初の音楽は人間とは関係なく生まれただろうが、自然の音から真の音楽を創造したのはまさに人間であった。人間は、その五感を通じてじかに体験した自然の物音や自分で作りだした音から、きわめて強い影響を受けた。何よりもまず、人間は声を持っていたのである。その声は洗練された表現こそできなかったが、自分の気持ちを伝えるには、大いに役立っただろう。原始人の出した声のなかには、わめき声や泣き声だけでなく、歌声・話し声なども含まれていたはずだ。実際、ピッチとリズムの2要素は、自然現象として人間の体のなかにそなわっていたのである。〉<sup>2)</sup>

彼らは人間が「自分の声で出せる音や、自然な生命のリズムと鼓動が自己表現の手段として使えそうだと気づいたとき」<sup>3)</sup>音楽は始まったとみている。人間が意識して自己表現の手段とする以前から、人の身体に自然現象として備わっていた自然な生命のリズムと鼓動は、人の成長のごく早い時期の表現の源となることは自然な現象だと言えよう。

### (2) 造形思考……アクティブな線・自然のなかのリズム

絵画は主たる二つの造形言語である色彩言語と形態言語をもつ。無論、色彩と形態は分離して考え得ない要素ではあるが絵画の組成要素としてそれぞれが語るものがある。観念的な造形手段の領域で生成される形態＝フォルムとコンポジションを模索したパウル・クレーは、形態の生成要素として原初の点・線について、そして自然の中のリズムの線への転化についての記述の中で、いかにしてフォルムは生ずるか、という疑問の答として「動因としてゼロの運動をはらんでいる」点だと言っている。また、「可動性ということが変

動力学的な運動。動因として動力的に見た点。

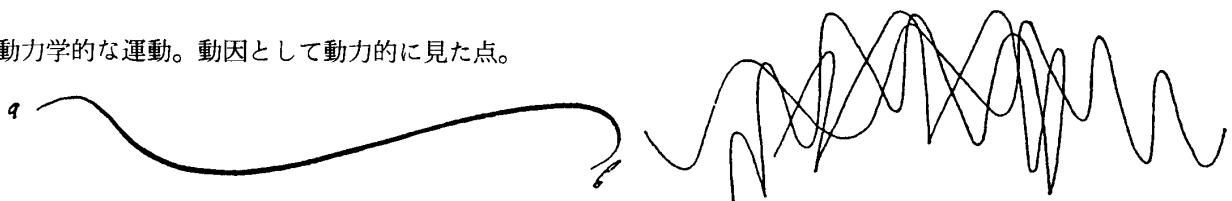


図3 アクティブな線（『造形思考・上』パウル・クレー著 1973 p. 161、163 より転載）

化の前提条件である。あるものは原（ウア）運動をもっている。点は、原（ウア）要素として宇宙的である。地上のものは動きを阻止されているので、推進力が必要であるが、原運動、動因は運動をはじめるひとつの点である（フォルムの発生）。」<sup>4)</sup>これが線への動きであり、動き始めるひとつの点がフォルムを発生させ、一本のアクティブな線がフォルムを生成するのである（図3）。

彼は線を最もプリ

ミティブな造形手段

であると位置づけ、

線が文明の発祥時の

基本的な要素だとす

る。線は子どもの描

画の出発でもある。

クレーはプリミティ

ブな段階の子どもを

次のように述べてい

る。「子供も通常は

線から出発する。あ

る日、子供は点の移

動という現象に気づ

く。そして、そのと

きの子供の感激は、

想像を絶するものが

ある。はじめのうち

鉛筆は、勝手気まま

に、好きな方向に動

きまわるだけである。

子供の眼がこの初め

ての作品を見守るう

ちに、自分のでたら

めに書いたもののな

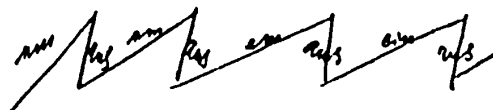
かにも、ある法則が

働いていることに気

づきはじめる。」「や

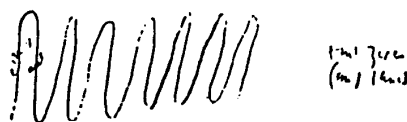
人間のもつリズム

人間は息を吸い、吐く



呼吸：吸う、吐く

（ひとつ、二つ）



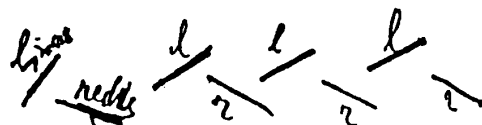
歩行のリズム。比較的長く

歩いている場合は

分割可能なリズム。

人間の足跡、

たとえば、雪の上の足跡



進行していく時間は造形の

領域では基本面の運動をも

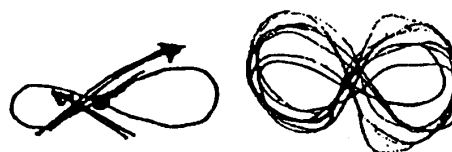
たらす。運動の単純なリズム

は必然的に律動的になる

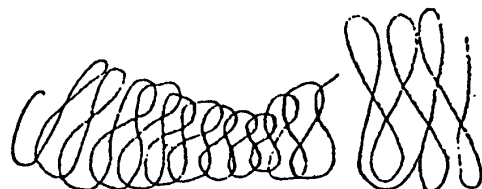


血液の循環の

生理学的な分析



純粋に流動的



自然のなかのリズム。

昼と夜

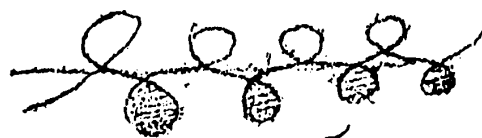


図4 自然のなかのリズム（『造型思考・下』パウル・クレー著 1973年 p.340より転載）

がてある秩序をめざして進みはじめる。これまでやったことについての批評ということがなされてくる。最初の混沌とした絵遊びから、次第に初歩的な法則性が芽生える。』<sup>5)</sup>

その後子どもはプリミティブな段階を越え、それを豊かに高めるための方法を見つけなくてはならない。クレーがプリミティブな段階の初歩的な法則性の芽生えの時期と指摘した描画こそスクリブルであり、それを越え行く先はフォルムの生成とコンポジションへの挑戦である。そして、フォルムを生み出すアクティブな線（図3）は、スクリブルに現れる円形へと移行する線ならびに触知線と何とよく似ていることか。

人はリズムを同時に三つの器官、耳・眼・わたしたちの肉体で感じることができ、リズムは人間の身体に強い作用を与える。クレーは自然のなかのリズムを線で表した。図4に示した自然のなかのリズムを表した線は、呼吸・血液の循環・歩行など人間の持つリズムに引き起こされた線である。これらもまた子どものプリミティブな線であるスクリブルのある時期に出現するものに類似する。

### (3) スクリブルの発達過程……W・グレッツィンゲルとR・ケロック

「なぐり描きは乳児の声音です。対象もなく言葉をもなしません、生のリズムそのものです。』<sup>6)</sup> W・グレッツィンゲルは『なぐり描きの発達過程』にスクリブルについてこのように記している。彼はスクリブルに三つの根源的現象を見ている。ひとつはハプティッシュな段階で繰り返す描く行為が続く時期、次に脈拍や血液のリズム・呼吸に導かれた形体へのプロセス、第三にコンポジションの原理として子どもの身体と世界の関係を象徴する三つの秩序、並列・変化・十字そして散布。原初のコンポジションである。子どものスクリブルにはあらゆるフォルムを形づくる諸要素が内包されており、自らの空間感情や形体感情にこれらを同化させていく。まさに造形表現の諸要素を試し育てる過程に見える。グレッツィンゲルはまた子どものスクリブルの根源的現象は、子どもの手がもつ「回転的空間感情」に導かれた円環運動・渦巻き・糸毬であるとする。これらは回転する線、動線である。スクリブルからピクチャーへ、描画における造形性の展開のプロセスはパウ・クレーのアクティブな線の変化に展開が共通

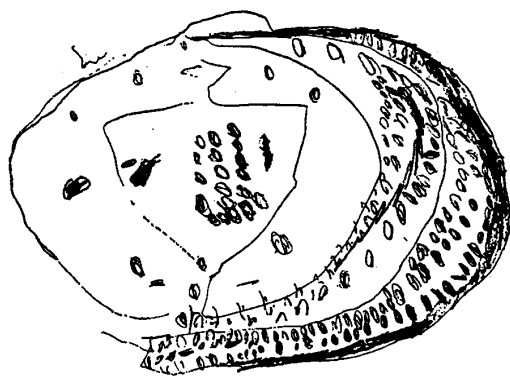


図5 脈拍に誘発されたスクリブル 3歳半（『なぐり描きの発達過程』W・グレッツィンゲル著 1970 p.37より転載）

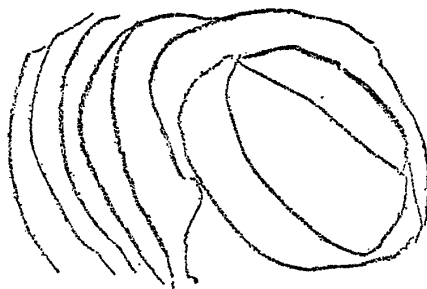


図6 呼吸によって誘発されたスクリブル 4歳初め（『なぐり描きの発達過程』W・グレッツィンゲル 1970 p.38より転載）



図7 ジグザク線 3歳 (『なぐり描きの発達過程』  
W. グレツィンゲル 1970 p.32 より転載)

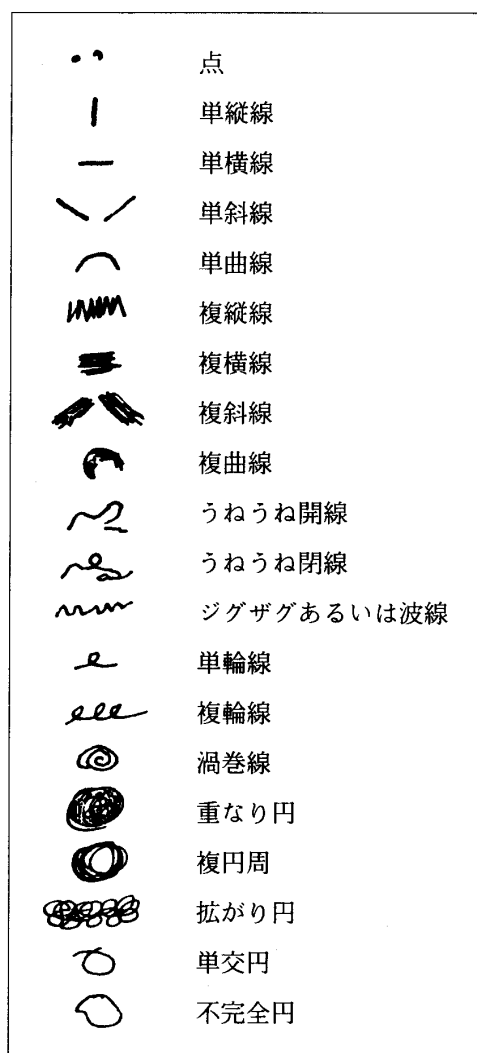


図8 基本的スクリブル (『なぐり描きからピクチャーへ』ローダ・ケログ著 1977 p.19 より転載)

している。根底にはスクリブルの表現を導く子どもの身体のリズムがあった。

従来、子どもがスクリブルすることから得る基本的な喜びは運動快感だと言われてきた。ローダ・ケログは、それを視覚的快感が基本だと言い換えた。彼女は2歳以下の子どものスクリブルから20種類の基本的スクリブル(図8)を抽出し、これらの線や記号を使って子どもが空間にどのようにスクリブルするかということ、即ち「配置様式」を最も重要だと考えた。

「ダイアグラム」「コンバイン」「アグレゲイト」「マングラ」と移行するスクリブルの空間配置の様式は、フォルムの生成に關与するのである。画面空間に描かれたスクリブルを空間の中のまとまりとして捉え、そのまとまりは上記4種の配置様式を経過しつつ何らかの、例えばその後続く「太陽」や「人間」、延いては「花・自動車」等の単体のフォルム(図形)そのものを構成するためのカオスであった。

ケログはスクリブル研究に情意的な視点をもたなかった。前稿「スクリブルにおける表現の根」にW・グレツィンゲルとの比較を書いたが、ケログは子どものスクリブルの行為において視覚性を最重視し、原初からの人間に内包された身体のリズムや空間感情、自然のリズムが引き起こす生命の線、クレーが言うアグレッシブな線のような動きを問題にしなかった。造形手段としての絵画は具象であれ抽象であれフォルムを生み出す戦いを必要とする。しかし、絵画は単体のフォルムのみで成立せず、画面には空間性や動き、コンポジションなど他の造形要素がある秩序をもって存在するのである。ケログは、2歳児あるいは2歳以前の子どもの基本的スクリブルについては、運動感覚だけで描くことができとしている。これも極論ではあると思うが、この時期の子どもの描画表現の特質を実感するものである。スクリブルをビジュアルな面か

らのみ捉えることには限界があるだろう。<sup>7)</sup>

#### (4) フィンガーペインティング……ルース・フェゾン・ショウの実践

現在では各幼稚園、保育園でフィンガーペインティングは珍しいものではない。市販の指絵の具なるものも教材として登場し、造形活動で感触遊びの一角を堂々と占めている。一部では夏の遊び、3歳未満児が喜ぶ遊びとして本来の用途を誤解して定着しているように見える。フィンガーペイントやフィンガーペインティングがルース・フェゾン・ショウによって創始され、初めて子どもの教育に用いられたのが1931年2月、ローマのショウ女史の学校においてであった。「フィンガーペイントは泥パイの直系の孫である」<sup>8)</sup>と言う



図9 フィンガーペインティング（メロディーを作る五つの音が、「丘を越えて漂っていく」6歳『フィンガーペインティング』ルース・フェゾン・ショウ著 1982 p.33より転載）



図10 フィンガーペインティング（「月の樹たち」2歳『フィンガーペインティング』ルース・フェゾン・ショウ著 1982 p.41より転載）

ショウが開発した技法は、指を用いてフィンガーペイントを自由に拡げていくものである。それはすべての自由なリズムミクな筋肉運動で、子どもたちは心を開きリズムカルに手を動かしたり、自分の作品に詩のようなテーマをつけたたりした。音楽教育の中にフィンガーペインティングを取り入れて自由な曲作りに生かしてもいる。フィンガーペインティングに現れるリズムは絵画・詩・音楽となって表現される。ショウは「子どもたちは自然の持つ生命のリズムをたちまち感じとる。そのリズムは音楽、絵画や詩に共通するもので、芸術の道は本来自由であり、定まりの形式等ないのである。ある一人の子どもは音楽を聞く時、たびたび色彩や絵を見たが、その時にリズムを意味する何らかの特別な人工的刺激は彼に必要ではなかった」<sup>9)</sup> また、「一番幼い子どもに大してさえ、彼らが直接に、その感情を自分の手で絵の具を用いて画紙の上に表現するようにフィンガーペインティングをさせた時、私は気づいたのであるが、彼らの絵につけられたその表題は、小さい詩の形をとった。それはペイントを拡げていく時の筋肉運動と同じくリズムをもっていた。それこそ単なる第一歩ではあったが、それからやがて色彩によって音楽が表現されたのである」<sup>10)</sup> と

の事例を記す。自然がもつ生命のリズム、音楽・絵画・詩に共通すること、子どもの表現によく現れる音楽と絵画の表現が共有する現象である色聴を重視した。現れた絵画の表題を彼女が子どもから引き出すとき、それらは詩となったのである(図9)。ショウはフィンガーペインティングの結果現れる点や線の造形要素としての意味には触れず、描く行為のプロセスが産む筋肉運動のリズムを音楽や詩と結びつくものと考えた。フィンガーペインティングには生命のリズムが根底に確実に生きている。

## 2. 身体のリズムが現れる……「手がかり」の発見

人間がもつ自然のリズムとは呼吸や脈拍のリズムである。前述の研究者のほとんどが身体・生命・リズムをキーワードとしているように、それは音楽や絵画や詩の表現を導き、絵画表現ではフォルムの生成や空間構成の原点となっているようだ。では、身体のリズムはどのような様相で現れるのだろうか。そのひとつがスクリブルである。身体の中にあるリズムよりも視覚性を重視したローダ・ケログは、2歳児あるいは2歳以前の子どもが描くスクリブルを、運動的要素のみでもできるものであるとしてそれ以上の年齢のスクリブルと区別して考えた。この時期に子どもが描くスクリブルはケログにとって、視覚性だけでは説明し得ない原表現的要素のカオスであったのかも知れない。2歳前後は表象の世界の門戸が開けゆく時期である。また身体的にも乳児期最後の時期としてバランスのとれた身体をもつ。カオスから抜け出ようとするそれぞれの表現が独自の様相を見せ始め、スクリブルに描く(書く)<sup>11)</sup>点・線にも身体のリズムに導かれた痕跡が明快に現れるのではないだろうか。

1995年、筆者はひとつの調査を試みた。スクリブルを通じて音楽と絵画の表現における共通項をリサーチするため、2歳児クラスに在籍する子どもで、音楽が好きな子どもを

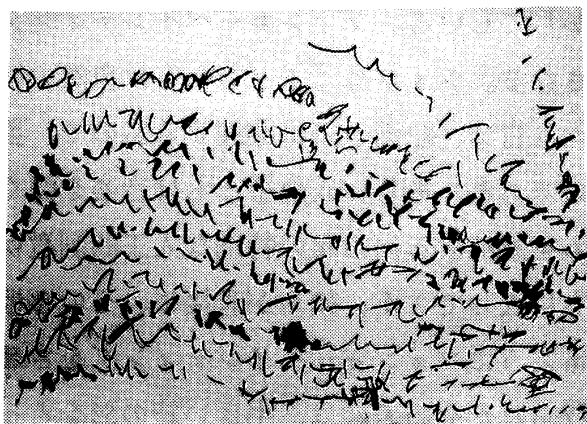


図 11 スクリブル 1994年10月 3歳3か月 女

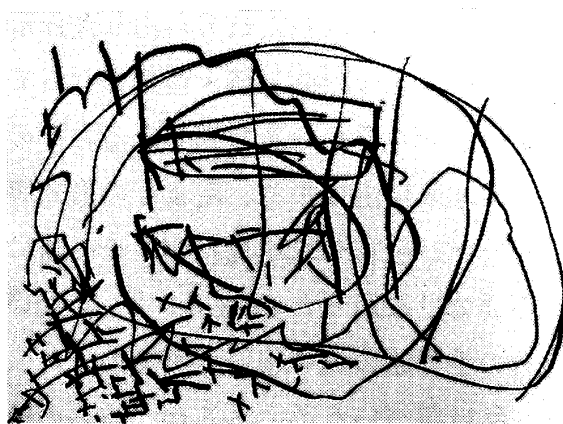


図 12 スクリブル 1995年10月 3歳 女



5名を選び、彼らのスクリブルに現れた点・線等を分析したのである。そこに現れたものはいくつかの特色ある点・線・記号群で、ベンツェ・サボルチやW・グレッツィゲルが音楽の原点やスクリブルに心臓（脈拍）や呼吸のリズムを根源とした表現を捉えたのと同様に、身体のリズムを誘因としたスクリブル上に現れる痕跡だと考えた。これらを音楽と絵画の共通項としてリサーチの「手がかり」として、音楽と絵画の相互関係、子どもがもつ音楽と絵画への興味・関心や表現意欲の関連性を考察すると共に、「手がかり」の点・線・記号等の意味を探りたいと思う。以下は調査の対象を1995年度より若干広げての、「手がかり」からのリサーチと考察である。

### Ⅲ スクリブルを調査する

#### 1. 「手がかり」の提示

1995年度の調査結果から、2～3歳時期の「音楽が好き」な子どもが描くスクリブルには共通点があることがわかった。何れにも特色ある点や線が出現したのである。子どもたちはそれらの表現ツールを使って自らの身体のリズム、心拍や呼吸のリズムを画面に表現したとも考えられる。特色あるツールは、点・ごく短い反復線・小さい糸毬・回転する糸毬・小円・このような細かいジグザグ線・ジグザグのハプティッシュな線・短い平行線・短い直線または曲線・ゆっくりしたストロークの長い曲線または円形、楕円等で、それらは並んだり嵌め込まれたりした状態で現れた（図13）。W・カンディンスキーの作品（図1、2）、P・クレーの「自然のなかのリズム」（図4）、W・グレッツィンゲルが提示した脈拍と呼吸が誘因となったスクリブル（図5、6）、ローダ・ケログの基本的スクリブル（図8）と対照するとおもしろい。表現ツールがスクリブルに現れた状態を括り、三つのポイントに整理した。

- ① 小さな記号のような点や線（短い線や反復線・回転する小円・さまざまな記号）を繰り返し使用し、線や形に添って並べたり嵌め込んだ表現。
- ② 空間を這うようなジグザグの触知線。
- ③ 空間を流れるような方向性や、リズムカルな表現ツールの使用。

スクリブルに現れる特色ある表現ツールと

①～③の出現状況を音楽と絵画が共通する表

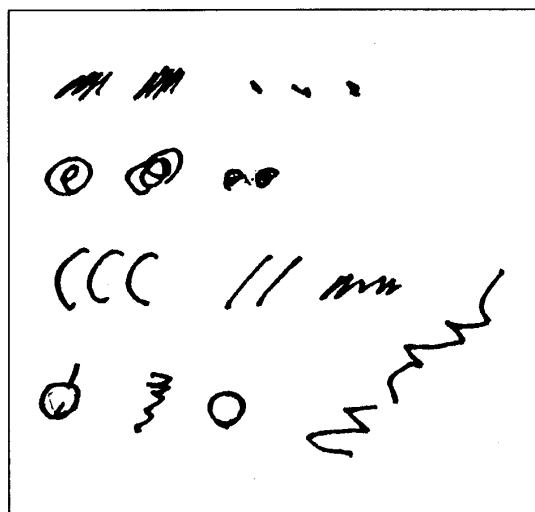


図13 スクリブルに出現した表現ツール

現の根が誘発したものだと考えれば、これらは子どものさまざまな表現を読み解く「手がかり」になるのではないだろうか。①～③を「手がかり」として提示したい。

## 2. 調査の概要

「手がかり」の有効性を確認するために前回の調査対象児が在籍した園で、次年度 1996 年度の 2 歳児クラス在籍児全員が 1 年間に描いたスクリブルを調査した。

- (1) 調査期間 1996 年 4 月～1997 年 3 月
- (2) 調査対象 京都市私立 K 保育園 2 歳児 21 名（男児 11 名、女児 10 名）
- (3) 調査方法 2 歳児 21 名が 1996 年度に描いたスクリブルを、「手がかり」をもとに分類、考察する。資料合計 85 枚。

## 3. スクリブルを読む

### (1) + 指数

資料のスクリブル 1 枚 1 枚を①～③に対照し「手がかり」の出現状況を調べた。「手がかり」①～③のそれぞれの項目における出現量を＋で表し、出現量が多い方から+++、++、＋とカウントした。「手がかり」に相当するものがないと判断したものは－とした（表 5）。各児の資料数が異なるため、各資料数を分母として①～③の＋の数の割合を求めた（表 1）。これを「手がかり」の＋指数と呼ぶことにする。

### (2) 音楽が好きな子ども

結果（表 1）から＋指数が顕著な特徴を示した被験児に見られたことは、

- ア. ポイント①～③全てに＋があること
- イ. + 指数 100 のラインに達するか、またはそれをオーバーする項目があること

の 2 点であった（図 14）。上記の項目、ア、イ双方または一方

に顕著な数値を示したスクリブル群を描いた子どもが「音楽が好き」な子どもではないかと仮定したところ、A・B・F・K 児の 4 名が該当した。表 2 は 4 名の＋指数をまとめたものである。－ポイントが最も高かったのが Q 児のスクリブル群であった（図 17 参照）。

表 2 「音楽が好きな」子の＋指数（「手がかり」から）

被験児の記号	①	②	③
A	40	20	40
B	100	17	17
F	180	80	180
K	50	50	50

表 3 「音楽が好きな」子の＋指数（聞き取り調査から）

被験児の記号	①	②	③
E	80	0	20
F	180	80	180
K	150	50	50
L	60	0	20
P	33	33	0

表1 2歳児のスクリブルに出現したツール「手がかり」の対照  
(+指数表)

被験児の記号 性 別 生年月日	資料 枚数	「手がかり」に現れた+の傾向 (上段は+の数、下段は+指数)			備 考
		①	②	③	
A 男 H・5・4・8	5	2 40	1 20	2 40	
B 女 H・5・4・9	6	6 100	1 17	1 17	意味
C 女 H・5・4・21	3	2 67	0 0	0 0	
D 男 H・5・5・16	6	5 83	0 0	2 33	呼吸線・意味 文字のようなもの
E 男 H・5・5・30	5	4 80	0 0	1 20	
F 女 H・5・8・25	5	9 180	4 80	9 180	文字のようなもの
G 男 H・5・8・27	4	1 25	2 50	0 0	文字のようなもの
H 女 H・5・9・6	5	3 65	0 0	0 0	
I 男 H・5・9・25	4	3 75	0 0	1 25	
J 男 H・5・10・1	3	3 100	2 67	0 0	
K 女 H・5・10・3	4	6 150	2 50	2 50	
L 女 H・5・10・21	5	3 60	0 0	1 20	
M 男 H・5・11・8	4	3 75	0 0	2 50	呼吸線
N 女 H・5・11・8	1	1 100	0 0	0 0	
O 女 H・5・11・12	6	4 67	0 0	2 33	
P 男 H・5・11・27	3	1 33	1 33	0 0	
Q 男 H・5・12・1	4	1 25	0 0	0 0	意味
R 男 H・5・12・21	4	1 25	1 25	0 0	
S 女 H・5・12・21	4	0 0	2 50	0 0	
T 男 H・5・12・25	1	0 0	0 0	0 0	
U 女 H・6・1・14	3	3 100	0 0	0 0	

表4 「特色あるツールと指数を示す」子の+指数

被験児の記号	①	②	③
A	40	20	40
B	100	17	17
D	83	0	33
M	75	0	50

スクリブルの調査と平行して2歳児クラスの担任から聞き取りと観察等による調査を行った。同クラス21名中に自発的に歌をよく歌う、リズムにのるなど「音楽が好き」な子どもが5名あった。E、F、K、L、P児である（表3）。+指数から選出した子どもと重なったのはF、K児の2名であり、A・B、E・L・P児には重なりがなかった。+指数と聞き取り及び行動調査を対照した結果、次のことがわかった。

- ・ F、Kの2名は+の数値が傑出しており、聞き取り及び行動調査の結果と対照して納得する結果である。
- ・ E、L、Pの3名については聞き取り及び行動調査の結果、音楽が好きな子どもであったが、数値的には同傾向を読み取れなかった。

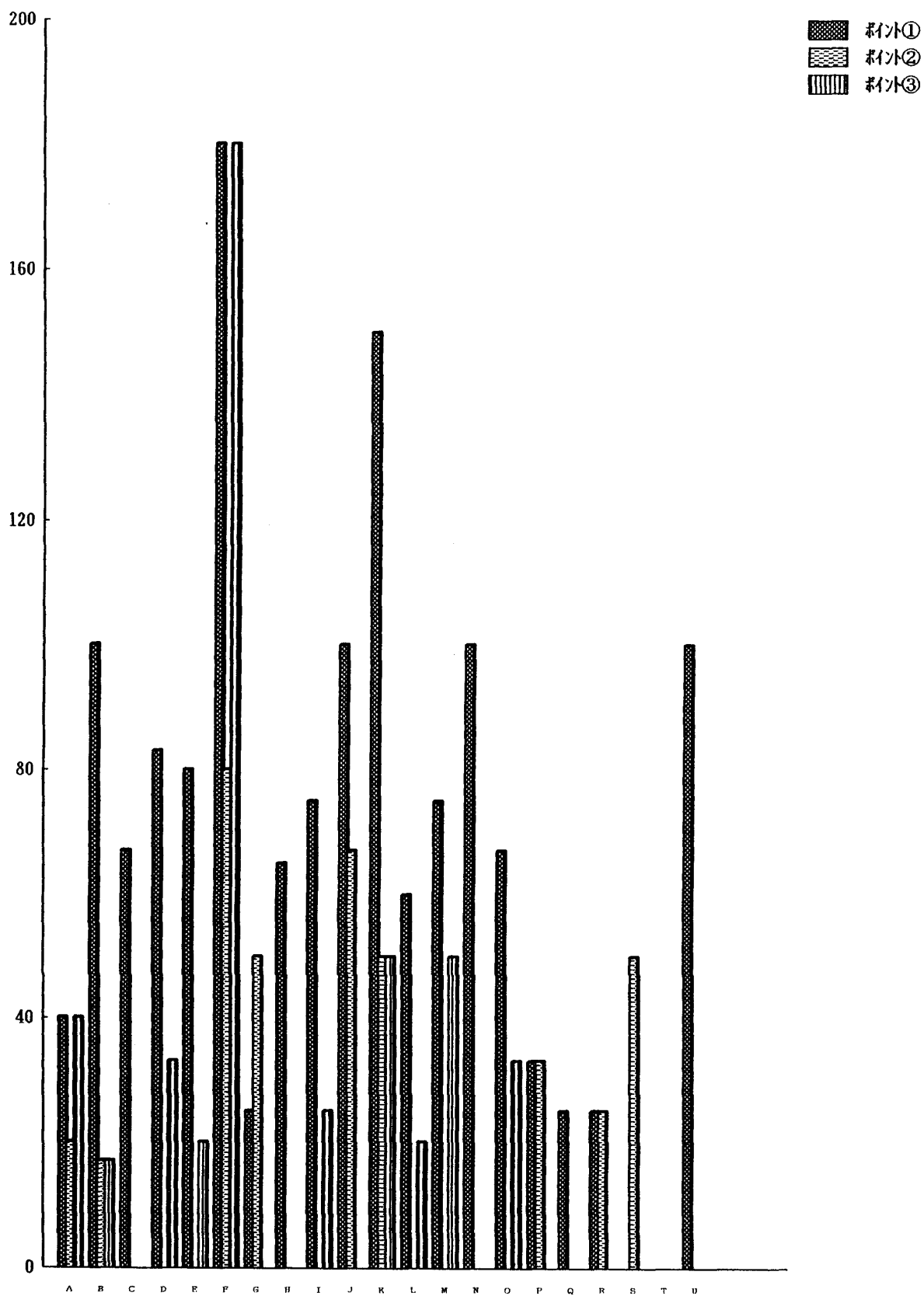


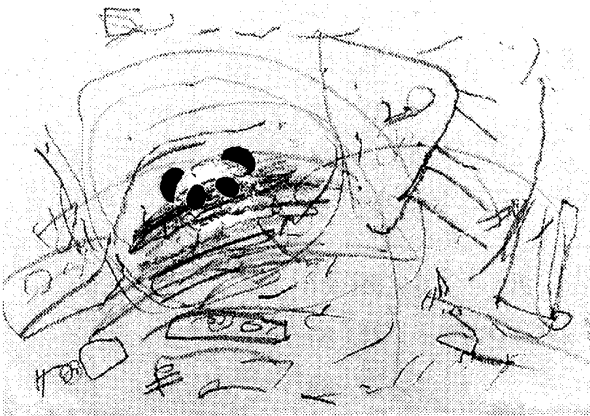
図 14 「手がかり」に現れた+の傾向

表5 「手がかり」の出現例（＋、－）

被験児の記号 性別・生年月日	製作月日	資料 no	手がかり		
			①	②	③
A 男 H・5・4・8	4 / 15	1	－	－	－
	5 / 31	2	－	－	－
	12 / 17	3	－	－	－
	12 / 17	4	＋＋	＋	＋
	12 / 17	5	－	－	－
B 女 H・5・4・9	4 / 15	6	＋＋	－	－
	5 / 31	7	＋＋＋	＋	＋
	12 / 17	8	－	－	－
	12 / 17	9	＋	－	－
	1 / 21	10	－	－	－
	1 / 21	11	－	－	－
E 男 H・5・5・30	5 / 31	21	＋＋	－	＋
	5 / 31	22	－	－	－
	12 / 17	23	－	－	－
	1 / 21	24	－	－	－
	10 / 18	25	＋＋	－	－
F 女 H・5・8・25	4 / 15	26	＋	－	＋＋
	5 / 31	27	＋	－	＋
	12 / 17	28	＋＋＋	＋＋	＋＋＋
	1 / 21	29	＋	＋	＋
	1 / 21	30	＋	＋	＋＋
K 女 H・5・10・3	4 / 15	47	－	－	－
	5 / 31	48	＋＋	＋	＋
	12 / 17	49	＋	＋	＋
	1 / 21	50	＋＋＋	－	－

被験児の記号 性別・生年月日	製作月日	資料 no	手がかり		
			①	②	③
L 女 H・5・10・3	4 / 15	51	＋	－	－
	5 / 31	52	－	－	－
	12 / 17	53	－	－	＋
	12 / 17	54	＋	－	－
	1 / 21	55	＋	－	－
P 男 H・5・11・27	5 / 31	67	－	－	－
	1 / 21	68	＋	－	－
	1 / 21	69	－	＋	－
Q 男 H・5・12・1	4 / 15	70	－	－	－
	5 / 31	71	－	－	－
	12 / 17	72	－	－	－
	1 / 21	73	＋	－	－

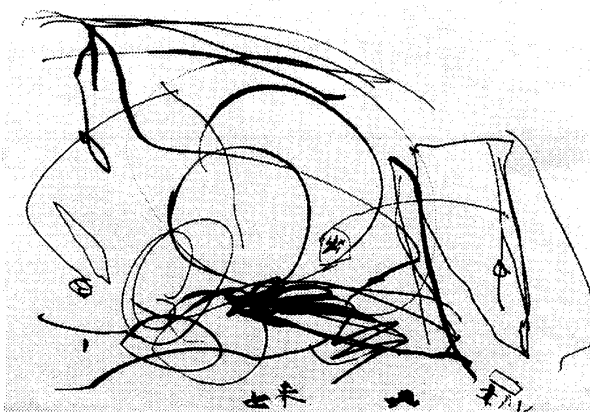
F 児 (H. 5. 8. 25 生まれ、女) のスクリブル



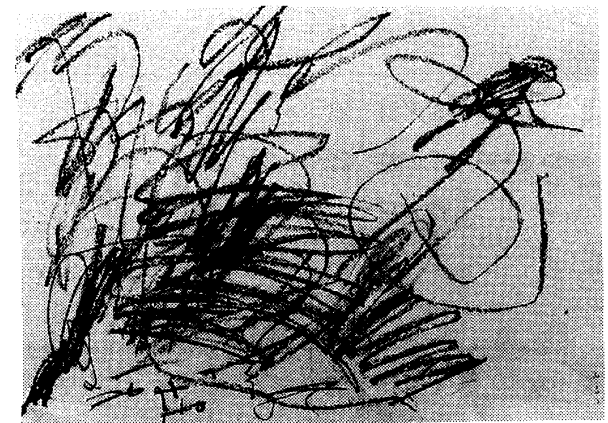
no.26 (ピンク、パス・紫) 4/15



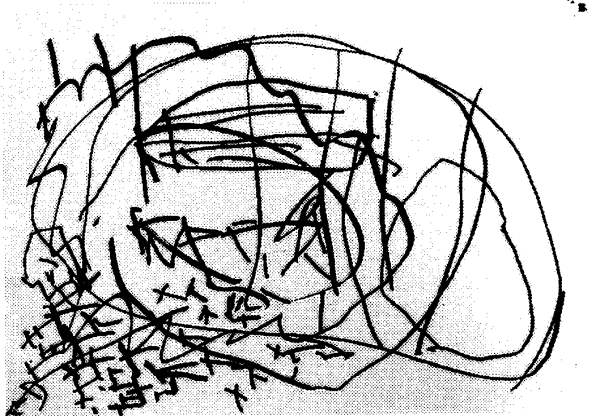
no.29 (クリーム、パス・橙) 1/21



no.27 (白、マーカー・緑) 5/31



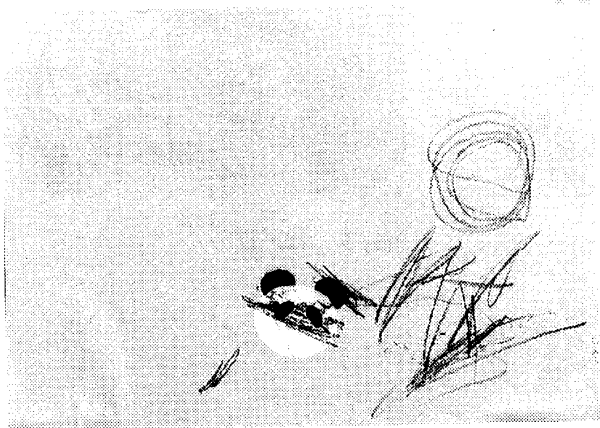
no.30 (クリーム、パス・橙) 1/21



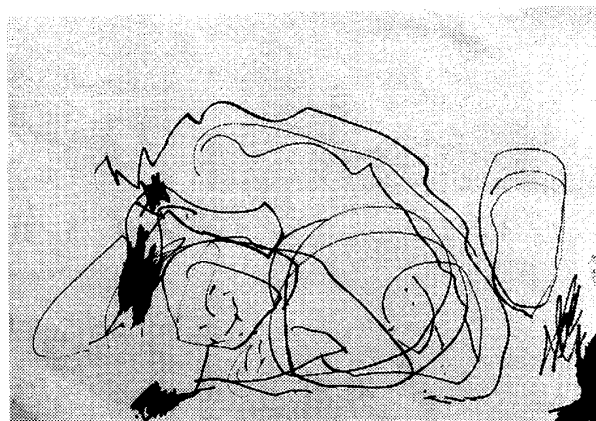
no.28 (白、マーカー・青) 12/27

図 15 F 児のスクリブル

K児（H. 5. 10. 3 生まれ、女）のスクリブル



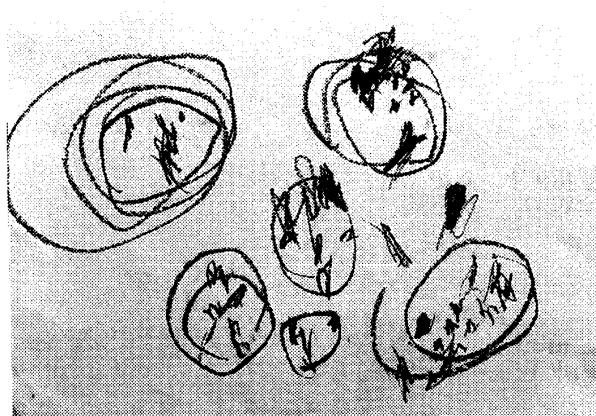
no.47 （ピンク、パス・紫） 4 / 15



no.49 （白、マーカー・ピンク） 12 / 17



no.48 （白、マーカー・ピンク） 5 / 31



no.50 （クリーム、パス・橙） 1 / 21

図 16 K児のスクリブル

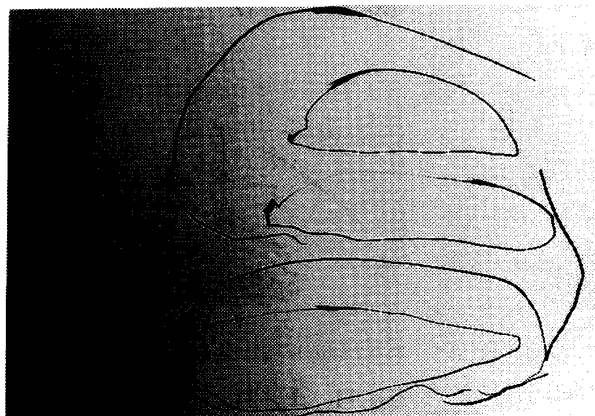
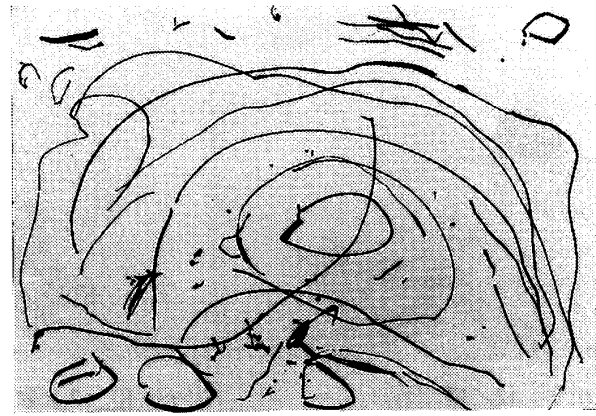
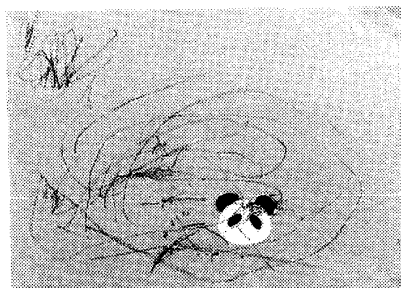


図 17 呼吸線ー1 D児 no.16（白・マーカー・緑）

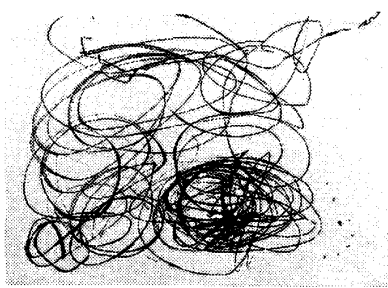


呼吸線ー2 M児 no.58（白、マーカー・青）

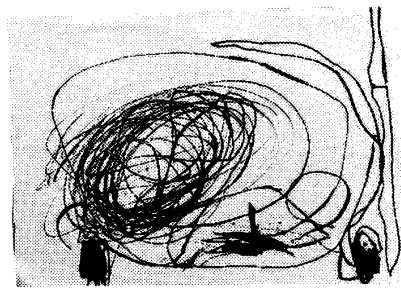
## スクリブルの流れ



no. 1 4/15



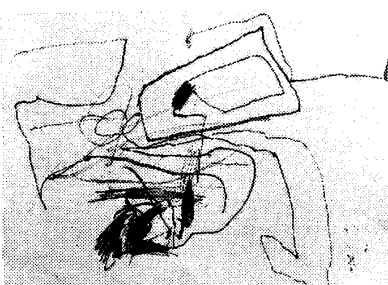
no. 2 5/31



no. 3 12/17

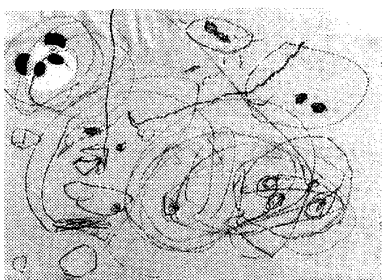


no. 4 12/17

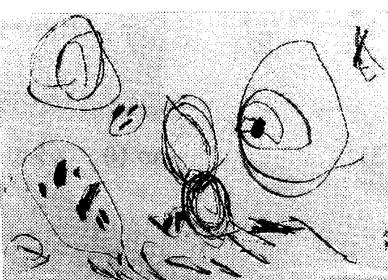


no. 5 12/17

図 18-1 A児



no. 6 4/15



no. 7 5/31



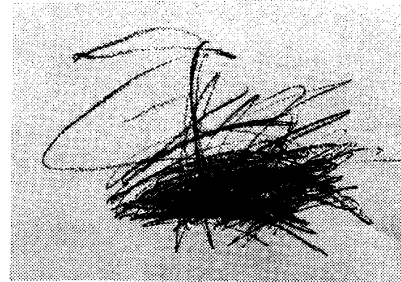
no. 8 12/17



no. 9 12/17



no. 10 1/21

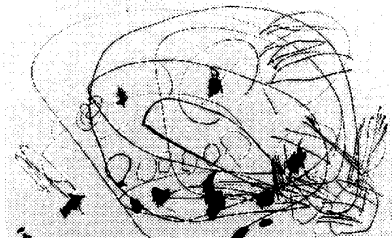


no. 11 1/21

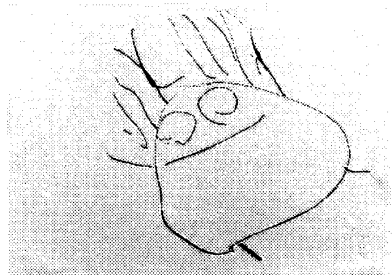
図 18-2 B児



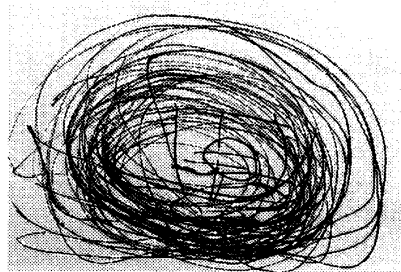
## スクリブルの流れ



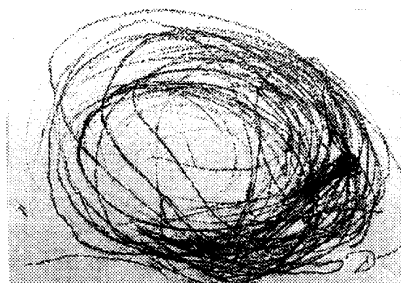
no.21 5/31



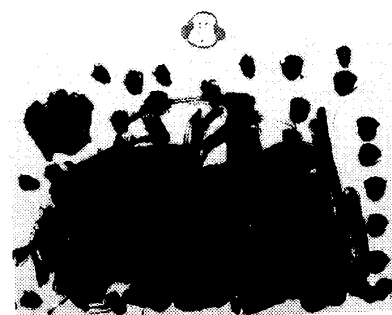
no.22 5/31



no.23 12/17

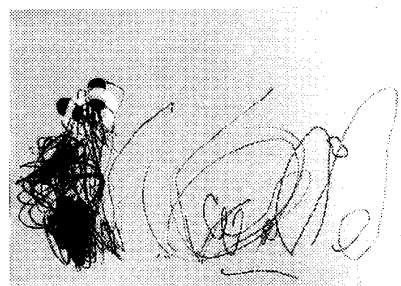


no.24 1/21



no.25 10/18

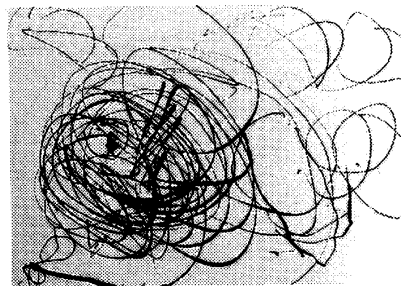
図 18-3 E児



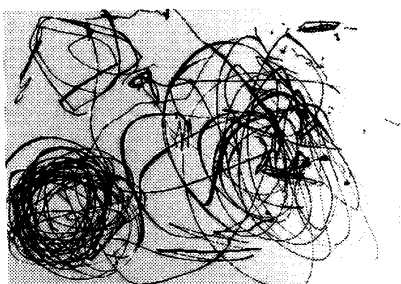
no.51 4/15



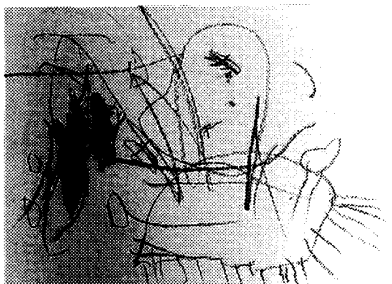
no.52 5/31



no.53 12/17



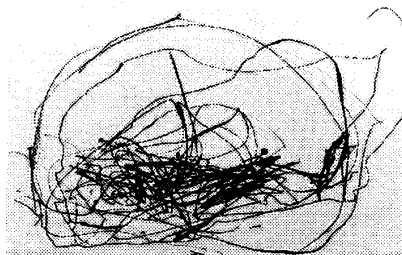
no.54 12/17



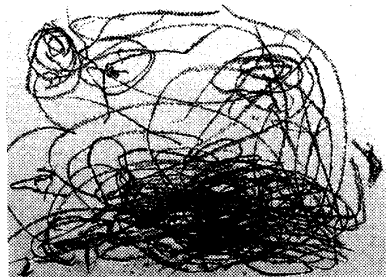
no.55 1/21

図 18-4 L児

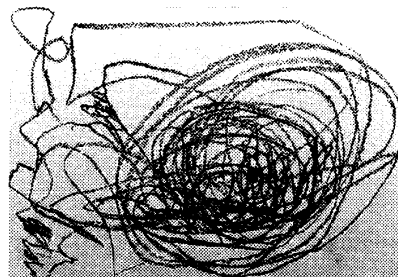
## スクリブルの流れ



no.67 5/31

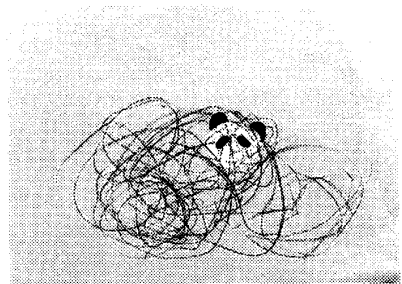


no.68 1/21

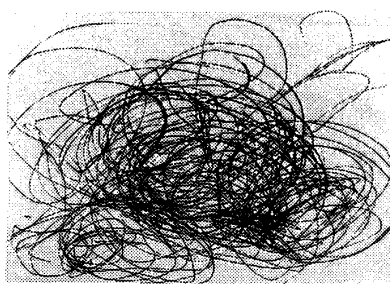


no.69 1/21

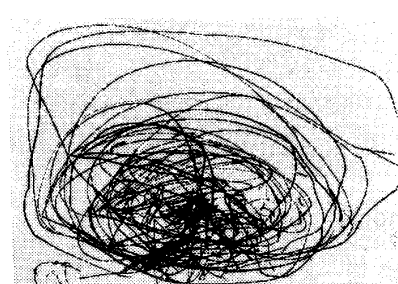
図 18-5 P児



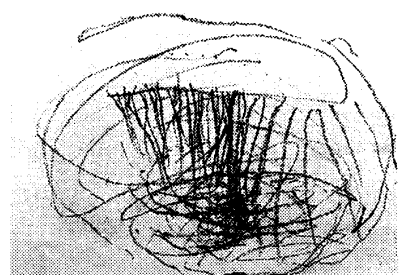
no.70 4/15



no.71 5/31



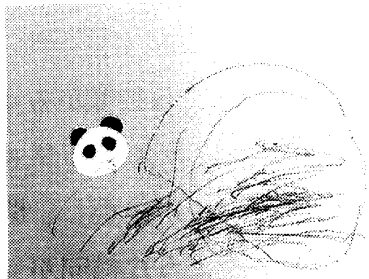
no.72 12/17



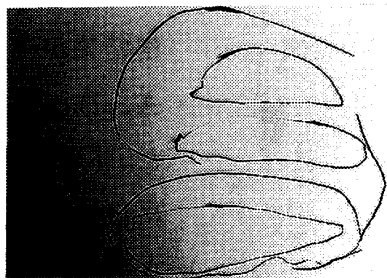
no.73 1/21

図 18-6 Q児

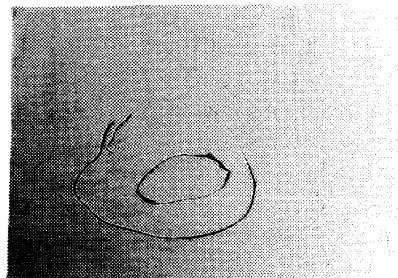
## スクリブルの流れ



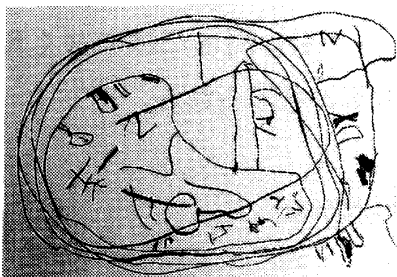
no.15 4/15



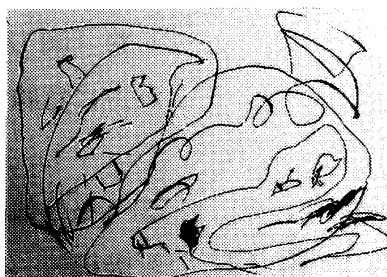
no.16 5/31



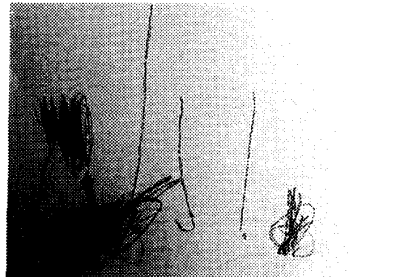
no.17 5/31



no.18 12/17

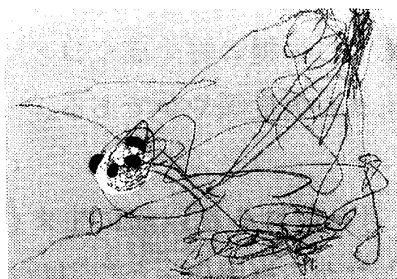


no.19 12/17

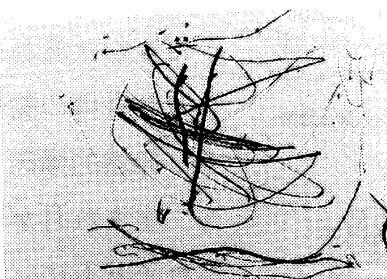


no.20 1/21

図 18-7 D児



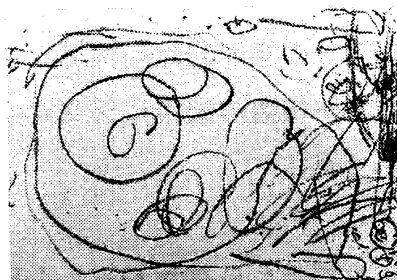
no.56 4/15



no.57 5/31



no.58 12/17



no.59 1/21

図 18-8 M児



見立ての言葉と、スクリブルしながら発するリズムを繰り返すような擬音やオノマトペのような表現と出会う。前者の意味付け・見立てを伴うスクリブル（B-10 火事、D-16 戦士、ポケット・17 飛行機ノタマゴ・20 消防自動車、Q-73 飛行機）には+がなかった。また、後者の行為に音や言葉をのせた場合では、「音楽が好き」で+指数が高いF児が「チョン、チョン、チョン」とリズムを口ずさみながら no.28 のスクリブルを描いていたこと、そのスクリブルは「手がかり」のツールで満たされていた事実、同じくK児がダイナミックな絵の具ペインティングの行為に伴い、「オットセイ、オットセイ、ランランラン」と歌っていた事例があった。言葉とスクリブルの関連では、スクリブルに意味付け・見立ての出現といった意味の世界が伴うものは、身体のリズムがスクリブルの空間へ現れにくくなるのではないかと考えられる。これとは逆に言葉が身体のリズムによって現れた場合、そのとき向かう表現空間に「手がかり」のツールとして姿を表すことを示唆しているのではないだろうか。さまざまな表現がスクリブルを通じて出現するが、これらが渾然と無秩序に現れるわけではないことが窺われる。

#### ○文字のようなもの

「手がかり」のツールを分類中、前回の調査では見当たらないものに出会った。それは恰も文字のように見える線や記号である。F-27・30、D-18（図17）、G-34 に出現している。子どもが文字のつもりで書いたもの、文字への胎動のように見えるものがある。

### 3. 「手がかり」の有効性

「手がかり」から音楽と絵画の表現の共通性の確認は次の条件下で可能であった。

- ・ポイント①～③のすべてに+がある。
- ・+指数100のラインに達するか、またはそれをオーバーする項目がある。
- ・（一人の子どもが1年間に描いたスクリブルを例にとるなら）+がどの時期のスクリブルにも継続的に出現する。

上記3条件を満たしたスクリブルが「音楽が好き」な子どものものであった。聞き取り行動調査の結果わかった「音楽が好き」な子どもは5名いて、そのうちの2名がこれに該当した。スクリブルから「手がかり」をもとに「音楽が好き」な子どもを探れるか、という点については「手がかり」の有効性を示すには至らないということになる。

逆説的であるが、+指数が①～③のどの項目にも0かもしくは低い数値を示す場合、その子どもが特に「音楽が好き」だということがなかった。しかも、スクリブルの表現も弱い場合が多い。このことから、2歳児クラスの子どものスクリブルに現れる特徴あるツールで成り立つ「手がかり」①～③が、人間の身体のリズムを誘因とした表現を視覚的に確認できる状態として刻まれたものであり、それらの+指数が、音楽と絵画の表現の根であ

る人間の身体のリズムの活発で豊かな湧出を示しているか、という視点については有効だと考えられる。

#### 4. 文字の発達から見たスクリブル

「手がかり」のツールとD・F・G児のスクリブルに現れた“文字のようなもの”は、文字発生との関連を意味するのだろうか。子どもの絵画を調査するとき情意的側面、認知的側面等スクリブルの研究的視点を定めることは、Ⅱ章に挙げたグレッツィンゲルとケロッグの視点の相違でも明らかである。では、空間認知の視点からはどのように捉えているのだろうか。

ケロッグは“*What Children Scribble and Why.*” (1957) とその著書の表題に記した。その答として1975年、ギブソンら (Gibson, E. j. & Levine, H.) はスクリブルに「基礎的グラフィック行為 (fundamental graphic act)」と呼ぶものを発見した。それは「スクリブルが、表現を通じてさまざまな図的情報を子どもに区別させるのに一役買っている」、点や線の「直線性、曲線性、傾き、連続、併合、交差等など」の弁別訓練がスクリブルの行為を通じて繰り返されることで、「後に続く文字習得上の基礎的な行為へ橋渡しするもの」だとしている。<sup>12)</sup> 子どもがスクリブルを通じて文字を弁別するトレーニングをしているのであれば、絵画と文字はどの時点で分岐するのだろうか。

子どもがトレースする行為 (描く、書く) を観察し発達段階に分けた、ヒルドレス (Hildreth, G., 1936) とレグリュン (Legrun, A., 1932) の研究 (図17参照) は、スクリブルに点や短いジグザグ線、曲線、記号、文字のようなものが段階を追って現れることを示している。「手がかり」のツールやケロッグの20の基本的スクリブルに見るものである。これはスクリブルが図形や文字そして絵画の要素を合わせもち、その後、絵画と文字やグラフィックな図形が誕生する分岐点にあることがわかる。スクリブルに出現する点や線は文字出現への胎動でもあった。

### IV おわりに……スクリブルの点・線が意味するもの

2～3歳時期のスクリブルに出現する特色ある点・線は身体のリズムの現れであった。音楽と絵画の共通の表現の根をスクリブルを通して探し求めた結果、原音楽・原絵画と呼べる表現が人間の身体のリズム、脈拍と呼吸のリズムを表現の起因としていたことがわかった。脈拍と呼吸のリズムは2～3歳の時期のスクリブルに特色ある点や線、記号として現れる。「手がかり」のツールとして抽出したものがそれに当たる。リズムのツールは単体で現れるだけではあまり意味をもたない。スクリブルの発達の傾向が若干このツールの出

現を支配するからである。故に、「手がかり」はこのツールの出現状況を重視する。スクリブルの点・線を+指数に変えて見たとき、表現に向かう力を読み取ることができるのではないだろうか。スクリブルから音楽の好きな子どもを選出し得た確率は40%であり、「手がかり」の有効性は十分立証されたとは言えない。しかし、+指数が0の子どもはスクリブルのストロークも余り強くなく特に音楽が好きというわけでもない。スクリブルに現われる点・線、特に「手がかり」の点や線は、人の身体のリズムの表れのひとつの様相であり、絵画や文字等へ分化しはじめたしるしでもあると考える。また十指数の検討からは、スクリブルの特色ある点・線の出現量が、身体のもつ表現力と関連するのではないかという結論に至った。絵画と音楽の共通項は、この点においてスクリブルの点・線から読み取れるといえる。

ギブソンらが「基礎的グラフィック行為」と呼んだように、スクリブルの点や線、初期的な記号は、絵画、図形や文字の出現に続く基礎的な行為の印、言わば自主トレーニングの痕跡である。人類はラスコーやアルタミラなどの壁画にプリミティブな表現を残した。文明発祥期の装飾的な絵や伝達を目的とした表現では、書くことと描くことはまだ同じ行為であった。それはスクリブルする子どもに語りかける保育者の言葉を思い起こさせる。スクリブルを始めたばかりの0～1歳児にむかって保育者が、「ジージーかこか」とにこやかに話しかけている姿が印象的である。描画でもあるのだが、という意識があり多少抵抗を感じる場面である。2歳児クラスではこれはめったに聞かれず、「お絵描きしようか」と変化する。発達的にみて子どもに理解できる言葉で表現している訳だが、スクリブルの意味を考える上で興味ある使い分けである。

スクリブルに出現する点や線は子どもの身体と心に深くかかわっていた。スクリブルの二次元の空間に点や線を描く行為は、二次元の平面上でさまざまな方法で空間利用を自発的に試している行為であり、表象へのプロセスでもある。スクリブルは多様な表現分野を生み出す大地であり、スクリブルの行為は子どもが自己を取り巻く空間とのかかわり、そこから生まれる空間感情を確かめている行為、即ち、子どもの自己と外界との対話でもある。スクリブルに潜む表現の根と、スクリブルという行為が育む表現の芽は、この時期から続く子どもの表現が総合された表現ではなく、表現方法が分化していく過程であることを語っている。スクリブルに出現する点・線の意味を深く受け止めた上で、子どもがしようとしている表現が世界のなかにどのようにあるのかを子どもに伝える役割を、表現にかかわる大人が担う必要を感じる。

ワシリー・カンディンスキーが音を描こうとした絵画に使った線、あるいは音や音楽を教材とした絵画（音楽感想画）に制作者が表す楽器の音やリズム、曲のイメージを表す点や線は、子ども時代に彼らがスクリブルに描いた「手がかり」にある線や記号と同様な形

状を示す。2～3歳時期のスクリブルで試した点や線は表現の分化後も、さまざまな表現の原点的な感情に戻るとき、表現者の空間に表現ツールとして使用されるのである。この0歳からの自主的なトレーニングの成果は決して消えることはない。スクリブルの意味と表現行為における2～3歳時期の重みを再認識すべきであろう。

〈引用・参考文献〉

- 1) 奥美佐子「スクリブルにみる表現の根」名古屋柳城短期大学紀要 18 1995. pp.113～133
- 2) ジョン・ペインター、ピーター・アストン、山本文茂他訳『音楽の語るもの』音楽の友社 1982. p.35
- 3) ジョン・ペインター、ピーター・アストン前掲書 p.35
- 4) パウル・クレー、土方定一他訳『造形思考上』新潮社 1973. p.161
- 5) パウル・クレー前掲書 pp.159～160
- 6) W・グレッツィンゲル、鬼丸吉弘訳『なぐり描きの発達過程』黎明書房 1970. pp.29～30
- 7) ロード・ケロッグ、深田尚彦訳『児童画の発達過程』黎明書房 1971. pp.18～26
- 8) ルース・フェゾン・ショウ、深田尚彦訳『フィンガーペインティング』黎明書房 1982. p.17
- 9) ルース・フェゾン・ショウ 前掲書 pp.137～138
- 10) ルース・フェゾン・ショウ 前掲書 pp.139～140
- 11) パウル・クレー 前掲書 p.159、木村重信『はじめにイメージありき』、鬼丸吉弘『原初の造形思考』等参照。
- 12) 空間認知の発達研究会『空間に生きる』北大路書房 1995. pp.61～63